

中国男性農民工の家族役割と家族関係の維持 —江蘇省南京市の調査から—

徐 琴
(人間発達科学専攻)

1. 研究の目的と背景

本稿は、中国南京市で出稼ぎをする男性農民工へのインタビューを通じて、彼らが出稼ぎという選択をした経緯、出稼ぎ後の地理的距離を超えた家族関係維持の工夫、そして自らの家族役割に対する認識の在り方を描写することを目的とする。

1978年以降、中国は「改革開放¹」などの政策実施によって急速な経済発展を遂げてきた。その一方で、都市と農村、沿海部と内陸部の地域格差は深刻化しつつあり、政府の農村政策の変化により、農村の余剰労働力の増加への対応として、地域間人口移動に対する規制緩和も進んでいる。このような背景のもとで、貧しい農村地域から都市、或いは沿海部の豊かな農村で働く農民たちが増加しており、彼らは「(農)民工」と呼ばれている。中国国家统计局の農民工監測調査によると、2009年12月31日までに、都市に入って就業している農民工は、1.4億人を上回り、今や彼らは中国社会の発展において欠かせない存在となっている。

しかし、農民工の賃金は都市勤労者のそれとはかけ離れ、大きな格差が生じている。また、都市・農村間はその戸籍制度²によって厳格に分断されており、労働保障、医療保障、就学保障などの多くの保障制度は戸籍に基づくため、都市戸籍を持たない出稼ぎ農民工が都市にきた場合、劣悪な条件下で就労するケースが多い。したがって、社会政策の視点からは、農民工たちは「弱勢群体³」という概念の中に含まれている。しかし、そのような厳しい立場に置かれながらも、農村からの出稼ぎ労働者の勢いは、戸籍制度の緩和と共に、むしろ強まりつつある。

そのような彼らを支えているのは、郷里の農村で暮らす家族の存在である。ただし、いくつかの農民工家族への調査では、彼らの出稼ぎは、その仕送りによって農村家族の家計を助けている反面、離婚率の上昇、「留守番兒童⁴」の教育問題、農村世帯の「空巢⁵化」など様々な問題を生んでいるとも指摘される(張, 2008)。彼らの出稼ぎという選択は、郷里の家族にプラス・マイナス両面の影響をもた

らすことは確かだろう。その現状について調べるとともに、地理的な距離をおいて家族関係がどのように維持され、農民工たちは家族の中の自身の役割をどのように認識しているのか。筆者はこれまで、女性農民工を対象としたインタビュー調査をもとにこの点について考察してきたが、今回は男性農民工の語りをもとに、このような関心から語りデータを整理したい。

2. 調査概要

2-1 調査対象

筆者は2011年8月に、江蘇省南京市⁶に出稼ぎに来ている、少なくとも一人の未成年子をもつ既婚男性農民工4名を対象に調査を行った。対象者の基本属性は、表1に示した通りである。

2-2 調査方法と調査内容

あらかじめ質問項目を設定したが、できるかぎり調査対象者に自由に語ってもらう半構造化質問紙に基づくインタビュー調査を行った。場所は筆者が指定した団地の休憩室であった。全員が対面で所要時間は1時間半から2時間強であった。なお、インタビューにあたっては、対象者の承諾を得て、録音し随時メモもとった。

主な調査項目としては、基本属性のほかに、出稼ぎに至る経緯、都市生活の現状と評価、農村家族との交流・関係維持、将来の展望などの本人と家族の全般に関する項目を設けた。対象者の実際の人生経験に応じて掘り下げる項目は異なる。本稿では対象者たちが出稼ぎに出る前後から今日に至る人生経験に関連した語りを時間軸に沿って整理し、分析していく。なお、調査後のデータ処理については、まずテープ起こしをし、時間軸に沿って、それぞれ事例としてまとめ、日本語訳をした。

分析にあたっては、ポイントとなるフレーズや短い語句に踏まえながら、コーディングによってデータの縮約を行う。コーディングは主要調査項目に照らし合わせて行う。

表 17 調査対象者基本属性

ケース	年齢	出身	戸籍所属	民族	学歴	きょうだい構成状況	結婚年数	出稼ぎ先(年数)	職業(収入)	配偶者出身	配偶者学歴	配偶者の職業(収入)	主要被扶養家族(年齢)	子どもと同居中の家族	他の出稼ぎ家族(年齢)
a	31	安徽省績溪	農村	漢族	中学校	兄1人	4	南京(約12年)	料理人(約3000元)	安徽省績溪	中学校中退	サービス従業員(不詳)	娘(3)、父(60)、母(60)	父、母	妻(28)
b	34	江蘇省淮安	農村	漢族	中学校	姉3人(1人死去)	4	南京(15年)	料理人(約4000元)	江蘇省塩城	中学校	パート(不詳)	息子(3)、義父(不詳)、義母(不詳)	妻、義父、義母、	/
c	36	安徽省阜陽	農村	漢族	中学校	兄2人、妹1人	10	上海(2年)、南京(15年)	料理人(約4000元)	江蘇省泰州	専門学校	工場職員(約1500元)	息子(5)、義父(60)、義母(60)	義父、義母	妻(33)
d	41	江蘇省流陽	農村	漢族	高校	兄4人、弟3人	14	南京(16年)	家政サービス(不詳)	雲南省	小学校3年	不詳	娘(17) 息子(14)、父(76)、母(78)	父、母	/

その一方で、繰り返しオリジナルの文脈に立ち帰って、それを参照しながら行為や語りの意味を明らかにしていくことに努めた(佐藤, 2008)。

3. 事例紹介

3-1 aさん

16歳で中学校卒業後、半年間左官の見習いをし、その後半年間左官関係の工場で働いた。本人はきつとは思わなかったが、両親はこのまま大変な左官の仕事を続けさせたくなかった。19歳の頃、両親が知り合いに頼んで本人を南京に連れていってもらい、料理人の見習いを始めた。その時の師匠の姪が後に妻になるが、知り合ってからすぐに交際したわけではない。21歳で現在の勤め先に入り、妻も当時同じところで働いていた。23歳頃、両方の家族の了承を得たうえで、妻と正式に交際しはじめた。25歳頃、より良い条件の仕事があったため一時に転職したが、当時交際中の妻と離れ離れになってしまうため、また元の勤め先に戻り、27歳で結婚した。翌年、娘が生まれ、妻は娘の世話で約1年仕事を辞めて実家にとどまったが、娘が離乳したらすぐ復帰した。現在は娘を実家の両親に預け、夫婦で出稼ぎをしている。本人は娘と交流が少ないため、それほど娘に対する愛情が深くないという。今後このまま出稼ぎを続けるが、当分娘を都市に迎える予定はない。

3-2 bさん

bさんは再婚家庭で生まれた。両親は同じ村だったため、再婚した後もそれぞれの家で暮らし、本人は主に父親の家で成長した。両親の考えもあって、本人は父親の再婚前に生まれた3人の姉のこのみきょうだいと考えている。中学校卒業後、実家のがちょうの飼養・販売を手伝ったが、リスクが高くあまりもうからなかった。19歳の頃、親戚に連れられ南京に出稼ぎにきた。ある料理店で中華料理人として見習いをした。その後幾つかの料理店に転職

後、現在のレストランの給料で満足し、生活も一応安定してきた。実家の経済状態を考慮してしばらく結婚の意志はなかったが、28歳になって間もなく父親が病気で亡くなり、近所に住んでいた妻と付き合いはじめて、30歳で6歳年下の妻との結婚を決意した。現在、妻は3歳の息子の世話で実家の塩城市に留まっている。本人は1人で勤め先の寮に住んでいるが、休みが少なく、年に何回も家族に会えない。近い将来妻の実家に行って自分のレストランを開きたいと考えている。

3-3 cさん

cさんの両親は農業に従事し、3人の息子の教育費から、成人後の結婚準備まで色々苦勞した。家はとにかく貧しかった。19歳の頃、上海に出て中華料理人の見習いを始めた。21歳頃、知り合いの紹介で南京に出稼ぎに来た。幾つかの店で働いた後、25歳頃に現在のレストランで一人前の料理人として働くようになった。妻とはそのレストランで出会い、2001年年末(26歳頃)婿入り形式で結婚に至った。妻は2006年3月に出産した後、レストランの仕事を辞めた。同じ年の10月に妻の反対を押し切って南京北部のマンションを購入した。現在息子は泰州の妻の実家に預けているが、時々南京に来るため、その世話で妻は家に近い工場で働いている。月収は夫婦2人手取りで5500元あるが、月2000元のローンの返済、息子の月約2000元の教育費や生活費、借金返済などで、さほど余裕のある生活はできない。近い将来、南京戸籍を取得し、息子を南京に迎え教育を受けさせたいと考えている。

3-4 dさん

dさんは8人きょうだいの5番目である。全員男の子で、両親は農業だけで生計を立てていたため、子どもたちを学校に行かせることで精一杯だった。本人はきょうだいの中で勉強のできるほうだったため、高校まで行かせてもらった。高校卒業後は就職する場がなく農業に従事していた。

男のきょうだい数の多さで縁談話もなかなか5番目の本人のところに来なかった。農村では結婚が早いため、24歳になっても結婚できなかった本人のことで、両親は焦っていた。同じ村の知り合いにお金を払って、雲南省の貧しい山村から7歳年下の嫁を紹介してもらい、入籍せずにそのまま同棲を始めた。25歳で娘が生まれたが、当時は家計が厳しく、娘にミルクを飲ませることさえ難しかった。それをきっかけに、本人は農業以外の仕事に就くことを考えるようになり、月に約150元の教職や300元以上の出稼ぎの間に迷った末、出稼ぎを選んだ。27歳頃、娘を両親に預けて妻を南京に迎えた。28歳頃、南京で息子が生まれた。34歳頃、妻は都市生活の誘惑により、本人と息子を置いて別の都市に行ったきり帰って来なくなった。その後3年間、電話で子どもの扶養を共同的に負担してもらうように交渉したが、彼女は同意しなかった。そして本人が37歳になって以降は、妻と連絡がつかなくなった。本人はやむをえず、両親の支援を受けながら2人の子どもを物心両面にわたり育てている。子どもの成長とともに増大する支出に応じて、プロパンガス配送、新聞配達などいくつかの仕事を体験し、現在は家政サービスに従事している。こうした苦労はあったものの、現在、娘は専門学校1年、息子は中2で、物心両面における自立も近い。本人は、体力が許す限り都市で働き続けたいと考えている。

4. 語りの分析

4-1 出稼ぎに至る経緯

1980年を境にし、それ以前の「人民公社⁸⁾」の時代もそれ以降の農家生産請負責任制⁹⁾の時代も、農業における家族労働力は重要であり、調査対象者たちも10代の早い段階から農業に従事した。しかしその後、農家生産請負責任制が定着してくると、農業生産の効率性が高まり、余剰労働力が増えたことを背景に、対象者たちは農業以外の仕事を求めざるを得なくなった。各対象者の出稼ぎ年数は、30代のaさん、bさん、cさんはそれぞれ12年、15年、15年であり、40代のdさんも16年と、31歳で最も若いaさんを除きさほど違いはない。これは、aさん、bさん、cさんの3人は10代の未婚期から出稼ぎに出たのに対し、dさんは結婚し子どもができた後、27歳で初めて出稼ぎに出たためである。1970年生まれのdさんの場合、未婚期はもちろん、結婚後もしばらくは農業により生計を立てることが可能であったこと、また政府の農民工に対する規制緩和が1990年頃から急速に進んだため、本人の年齢や家族状況にかかわらず、この時期以降に農村からの出稼ぎが急速に増加したという構造的要因の反映でもある。

30代の3名の対象者は、出稼ぎの動機について次のよ

うに語った。

農村では働く場はないし、農業だけでは生きていけない時代になったので、(出稼ぎに)出るしかなかった。【事例a】

家は貧しかった。僕は中学校を卒業した頃、家ではがちょうの飼養・販売の商売をしていたけれど、あまりもうからなかった。リスクも大きかったよ。なぜかという、がちょうはよく病死したから。ちょうど南京で働いていた親戚がいたので、彼に頼んで(出稼ぎのために)南京まで連れてきてもらったんだ。【事例b】

両親は4人の子どもを育てていて、特に男のきょうだいは僕も含めて3人で、嫁をもらうまでは(その資金なども含めて)とても大変よ。経済的なストレスは大きかったと思う。安徽省のような農村では、商売をするなんてとても考えられないし、両親は農業だけに頼って私たちが大人まで育てるだけで色々苦労したと思うよ。【事例c】

以上の語りからわかるように、3名の対象者は、自分自身の生活や将来の展望も若干考慮したとはいえ、実家の家計を支えることを目的に10代の早い時期に出稼ぎに出たのである。一方、結婚と子どもの誕生後に出稼ぎに出たdさんの語りは、まったく異なっていた。

(子どもができるまでは)農業だけで、食べ物に何とか困らずに維持できたよ。娘が生まれた後、粉ミルクさえ飲ませるお金もなかったので出稼ぎを決心したんだ。【事例d】

dさんの場合、政府の農業政策や農民工問題を含む労働政策の変更遭遇した時期、すなわちライフコース論でいうところのタイミングの違いが、家族生活の異なるステージでの出稼ぎという選択に結びついていることがわかる。

しかし、4名の対象者はいずれも家族の経済的要因から出稼ぎに出た。それゆえ、出稼ぎによって得た収入の多くを郷里の家族に仕送りをした。この点についてcさんは次のように語っている。

親も大変だったよ。実家では農業をやるだけでは稼ぎにならないから。僕はせっかく稼げるようになったから、少しでも親を楽にしたかったんだ。親はいつも断っていたけど、毎月の半分以上を仕送りしていた。【事例c】

他のaさんやbさんも同様の発言をしており、それは「親孝行」という規範からみて当然の行動だと認識してい

た。一方、結婚と子どもの誕生を経て出稼ぎに出たdさんは、子どものミルク代、将来の学費や生活費をまかなうために出稼ぎに出たため、当然仕送り先は結婚によりつくった自らの家族であり、親への仕送りはほとんどなされていなかった。

以上のようなステージの違いはあれ、出稼ぎの決断に当たって家族の経済的要因が4人の対象者に共通する最大の要因になっていた。ただしaさんのように、両親が本人の将来の生活安定に配慮して出稼ぎを勧めてくれた事例もみられた。

中学校を卒業して間もなく、両親の意見に従って、実家で左官の見習いを始めたんだ。半年後、一人前の左官として働き始めた。僕はその仕事を楽しくやっていたけれど、親は毎日遅くまで働き、汚くなって帰宅していた僕を見て、辞めさせようと思ったらしい。誰かから意見をもらったのだと思うが、僕に（都会に出て）料理人になるように勧めたんだよ。【事例a】

aさんは、きょうだい2人と他の事例に比べて少ないこともあって、両親は当面の収入を確保することよりも、aさんの長期的な生活設計を考え、手に職をつけることを勧めたものと推測される。

4-2 出稼ぎ後の家族生活

1) 家族への経済支援

前節でみたように、対象者たちにとって「家族の経済状況の改善」は出稼ぎを促した大きな要因の一つであり、出稼ぎ後も家族への経済支援は彼らの最大の役割だと認識されている。ここでいう経済支援には、現金の仕送りだけでなく、家族のために購入した洋服、食品、お土産なども含まれる。

結婚前から出稼ぎを始めたaさん、bさん、cさんは、出稼ぎを始めた当初は経済支援の対象が実家の両親であったが、結婚と子どもの誕生を経て、子どもの世話を依頼している家族が中心となった。この3人は、調査時点では3歳から5歳までの幼稚園に入園する前もしくは通園中の子どもが1人しかおらず、まだそれほど多額な経済支援は必要とされない段階であった。彼らの子どもは幼いため、送金の対象は子ども本人ではなく、子どもの世話をしている両親などであった。ただし、3人の事例から、子どもの今後の教育準備については、具体的な見通しをどの程度持ち、どの程度責任感を感じているかに個人差があることが確認できた。例えばaさんは、「子どもはまだ小っちゃいから、今後のことをあまり考えていない。今は義務教育だから、小学校や中学校はそれほどお金がかからないけど、その先

は分からない。だって子どもは勉強のできる子かまだ分からないから…」と語った。aさんと同じようにbさんも、息子がまだ3歳で先のことをあまり考えておらず、子どものために貯金するなどの準備はしていない。しかし、子どもが後1年で小学校に入学する予定のcさんは、子どものために惜しまずにお金を使いたいと考えている。そしてcさんは、幼稚園は息子にとって知力発達の大切な段階と考えているため、費用は高くても良い幼稚園に通わせ、栄養面にもしっかり配慮をしていた。

私たち夫婦は2人で月5500元の手取り収入があるよ。しかし、月2000元のローンの返済がある。息子は生活費や学費などで月に2000元ぐらい必要になる。(中略) 来年、息子を南京の小学校に入れたいがまだ南京戸籍を持っていないので13000元の賛助費¹⁰が必要そうだから、私たち夫婦はマンションに住んでいるけど、貧乏な生活を送っているよ。高級なものは食べられない。新しい洋服も買えないな。【事例c】

また、前述したように、aさん、bさん、cさんは子どもの世話を主に本人か妻の両親に頼んでいる。このため、子どもの世話を頼んでいる両親に対しては定期的に経済支援を行うのが当たり前のように思っているが、もう一方の両親に対しては、正月などの時だけ何百元かを渡すことに留めている。ただし、それは親孝行を諦めているということではなく、親の状況に応じて対応するという共通の考えに基づくものである。

一方、結婚と子どもの誕生後に稼ぎに出たdさんは、出稼ぎを続けてきた16年間、経済支援の対象は一貫して子どもであった。妻と離婚するまでは、妻も家計を支える役割をある程度果たしていたが、離婚後は本人だけで2人の子どもの教育費や生活費全般の負担を引き受けざるを得なかった。そのような経済事情を知っている両親は、本人から両親への経済支援を断っているようで、本人は別の形で両親に親孝行するしかないと考えている。

僕は離婚後ずっと1人で子どもの教育費や生活費などを負担している。しょうがないよ。元妻は分担したくないから。かなりの出費だよ。僕は出稼ぎ後何回も仕事を変えることで給料は上がっているけれど、物価も上がっているからなかなか余裕が出てこない。毎月の収入をほとんど子どものために使っている。2人は月に生活費は少なくとも400元。娘は専門学校に受かったからその入学金や学費は何万円になる。息子もこれから高校に入るにはもっとお金がかかる。僕は毎日お金のことで悩んでいるよ。ひたすらに働くしかない。春節でも休まない場

合が多い。(中略) 両親は私の苦勞を理解していると思うよ。だって僕がお金を渡しても返されるから。しかたなくて、僕は出稼ぎで耕せなくなった田んぼを他人に請け負ってもらい、毎年何百元の請負金を何とか両親に受け取ってもらった。【事例 d】

aさん、bさん、cさんに比べ、dさんの家族に対する経済支援の負担は明らかに重い。これは子どもの成長段階の違いによる教育費負担の重さに加え、dさんは離婚により1人で自分と家族の生活を支えなければならぬためである。

2) 家族との交流

結婚前から出稼ぎに出ているaさん、bさん、cさんは、当初は出身家族への経済支援のみの役割を果たし、家族との交流も経済支援に関連する部分に限られていた。しかし、その後、結婚と子どもの誕生を経て、夫として父としての役割を意識して、経済面以外にも家族との交流を保つ努力が必要となった。中でも、郷里にいる子どものことは最も大きな心配の種であるが、子育ての中心部分は妻に任せているため、子どもが生まれたことによって仕事を中断する必要はなかった。したがって、話せるようになる前の子どもとはほとんど直接の交流はなかった。子どもが成長するにつれて、子どもと電話で話すのみならず、本人が帰郷したり、子どもを都市に迎えるなどして、直接の交流をするよう努めるようになった。これに対し、物心がついてきた子どもの側は、一時両親に会うことで、却って離れ離れの日常に対しては強い嫌悪感や抵抗感を示すようになった。子どもの反応は年齢によって異なっているが、出稼ぎ初期のころは4人の対象者それぞれに困難を感じたようだ。

(2011年の)夏に娘を南京に迎え1ヶ月ぐらいい一緒にいた。毎日楽しく遊んだよ。でも僕も妻も仕事があるので、それ以上長く面倒を見てあげられなかったんだ。一ヶ月後、実家に送った時、泣かなかったけれど、「パパ大嫌い」と言った。今でも南京から電話をしても時々出てくれない。まだ娘なりの態度で抵抗を示しているよ。【事例 a】

aさんと同じように夫婦2人で出稼ぎをしているcさんも、頻繁に電話したり息子を南京に迎えたりしている。bさんは妻が留守で息子の世話をしているため、年に2回ぐらいい時間を作って息子と会うようにしているが、ほとんど妻任せの態度を示している。しかし、この3人はずっと出稼ぎを続けてきたため、女性農民工が頻繁に子どもと交流をしてその成長に伴う変化を把握しているのに対し(徐、

2011)、子どもの変化にあまり気づいておらず、また子どもの抵抗感や親に対する消極的な態度に対してもさほど気にしていないようだ。aさんは娘の抵抗に対して、「妻は子どもに会いたがっているが、僕は平気だけどね。そもそも生まれた時から一緒にいなかったせいかもしれない」と説明した。bさんやcさんも稼ぎ手としての役割を強調するが、子どもとの交流は妻任せの態度である。対照的に、シングルファーザーのdさんは、子どもとの交流においてより積極的である。家に電話を設置する前は連絡はあまりできなかったが、電話を設置した後、母親からの愛情を受けられない子どもたちに対して、意識的に母親役割まで果たそうとしているようである。

2人とも中学校に入って以来、学校に寄宿するようになったが、毎週週末家に帰ってくるので、僕は必ず時間を割いて電話しているよ。勉強のこととか生活のこととか色々聞く。何か悩み事があったらすぐ相談に乗ってあげたい。僕は気をつけていたよ。なぜかとうとう母親のいない子どもたちは、普通の子より敏感だと言われてるから。幸いにうちの子は大丈夫そうだよ。【事例 d】

ただしdさんは、娘との交流がうまく行っているが、子どもの成長とともに増大する経済支援の必要から仕事時間もいっそう長くなり、中学生の息子との交流についてはしっかりできていないと認識している。その理由についてdさんは、次のように述べた。

娘は3歳未満の時、既に両親に預けられたので、自立が早かった。今なら家事とか弟の世話など何でもできるよ。でも、息子は違う。息子は都市で生まれ元妻が家を出るまで手元で育てた。その後実家に帰らせて両親に面倒を見てもらったが、男の子なので親にいっそう甘やかされてきたと思う。だから、あの子は今でも自分が姉より大事なんだと勝手に思い込んでいるんだ。(中略)息子に対しては、どうしても手に負えない時はお金で満足させているよ。【事例 d】

また、子どもの存在は他の家族との交流を強める作用があり、子どもの扶養をしている両親などとの連絡は、ほかの家族より明らかに頻繁な傾向がみられる。特に子どもがいまだ幼いaさん、bさん、cさんは、子どもが話せるようになってからも直接十分な情報を得ることは難しいため、子どもの世話をしている両親から情報を得たり、妻と子どものことを話し合ってきた。それをきっかけに、子ども以外の家族との交流も増えたという。

僕と妻は電話で大体子どもの話ばかりするね。僕はもともと結婚前から口数の少ない性格だったけどね。【事例 b】

また a さんや c さんは子どもの世話を自分の両親や妻の両親に頼んでいるが、子どもの状況について聞くと同時に、両親の安否も確認するようになったと述べていた。

対象者たちは、子どもとの日常的な交流にはある程度対応できたとしても、教育やしつけの問題については様々な心配を抱いている。特に子どもが幼い a さん、b さん、c さんにとって、電話では実際の様子をみることはできないため、子どもの世話をしている家族・親族に任せざるを得ないところがある。b さん以外の 3 人は子どもの世話を両親に頼んでいるため、特に両親が子どもを溺愛してしまうことを恐れている。しかし、そのような不安に対し、実際に何らかの対応を取っているわけではない。徐 (2011) が女性農民工への調査で確認したような、本人が両親にしつけの方針について説得するなどの工夫はみられず、対象者たちは「僕は (子どもの教育について) 心配しようがない。妻に任せている」(事例 a) というような態度であり、そこには子育てにおける責任意識のジェンダー差がみられた。

3) 家族の中の役割

4 人の対象者の内、a さん、b さんや c さんは結婚前から、そして d さんは結婚や子どもの誕生を経験して以降に出稼ぎをはじめたが、現在は全員が結婚後の家族生活を維持することを最大の目的として出稼ぎを続けている。したがって彼らの出稼ぎは、夫として父親としての役割と密接に結びついていると言える。

まず夫としての役割や夫婦の関係性については、離婚している d さんを除けば、a さんと c さんは妻と出稼ぎ先で同居しているのに対し、b さんの妻は郷里に留まり、本人とは別居状態である点で違いがある。この内、出稼ぎ先で妻と同居している a さんや c さんは、妻と家事分担をしながら、都市生活を続けている。

僕は料理人なので毎日の食事を作っている。洗濯や家の片付けなどは主に妻がやっているけど、僕も時々手伝っているよ。【事例 a】

妻の職場は家に近いので、平日料理、洗濯などは妻がやっていることが多い。僕は料理人だけど、妻の料理にうるさく言わないよ。(中略) 休みになるとほとんど僕は食事を作っている。勿論洗濯なども手伝うよ。だって妻も仕事が大変だから。【事例 c】

一方、b さんは現在郷里にいる妻とは別居しているが、意識の上では妻と共同に家事を分担すべきだと述べている。その理由について b さんは、「家のこと、子どものことをほとんど妻に任せているので、妻も大変だと思う」と語った。また離婚を経験した d さんは、一般論としてではあるが、「僕は家政サービスに従事しているので周りには実は女性が多い。彼女たちは僕と同じように働き、僕と同じような給料をもらっているよ。だから、家の中のことも夫婦平等に分担すべきだろう」と語っていた。

妻の勤務状態や収入の多寡にかかわらず、対象者たち全員が、自分は男性であるからこそ、結婚後の家族においては「大黒柱」であるべきだと認識している。特に子どもができた後は、彼らの中でその責任感はいくらも強化されるようだ。

妻は出産・育児でしばらく実家にとどまり、何も収入がなかった。そんな時こそ、僕は一家の大黒柱として責任を負うべきだろう。【事例 a】

僕は一家の支えだよ。妻は出産後、育児でしばらく働けなかった。今は育児をしながら、実家のある工場でパートとして働き始めたけど、あまり稼ぎにならない。妻の両親も高齢であまり稼げない。だから、今ほとんど僕 1 人で一家を経済面で支えているよ。(中略) それが男としての責任だ。結婚後、この責任感は強くなったよ。【事例 b】

a さん、b さんの語りは、「大黒柱」という言葉で、もっぱら稼得役割の中心的存在であることが表現されている。一方、次に紹介する c さん、d さんの語りでは、同じく「大黒柱」という表現を使いながら、経済面だけにとどまらず、日常的なケア、情緒面、教育面など、より広範な役割が想定されている点が特徴的である。

中国語では「頂梁柱」という言葉があるように、僕は父親として、一家の大黒柱。妻より私は家族のことを、もっと広い視野から全体的に見ることができる。【事例 c】

妻が家を出た後、僕は父の役割だけでなく、母の役割もある程度できるようになったと思う。2 人の子をとっても優秀に育てたと言えないけど、普通の家庭の子と同じように、うちの子はそれなりに立派に成長した。僕は一家の大黒柱としての役割がきちんと果たせたと思う。【事例 d】

特に d さんは、シングルファーザーとして母親役割も含めて二役を務めてきて、その自負がうかがえる発言であ

る。その二役をこなす上でも、出稼ぎによる収入の獲得は大前提とされているが、それが他の役割との間で葛藤を生じがちであることは、すでに述べた通りである。

以上のように、「大黒柱」という言葉に若干のニュアンスの違いを伴いながらも、4人の対象者たちは、出稼ぎを継続した最大の理由が「家族のため」であったと語った。ただし、31歳と最も若いaさんは、家族への責任の認識以外に、都市生活のもたらす個人的な享楽の魅力についても言及していた。

僕はたぶん少し年上の人たちと違って、時々自分のためにもリラックスしたくなる。彼らは家族のためにがむしゃらに働く場合が多いけれど、僕は都市でたまったストレスを発散させないと働き続けられないよ。だから、僕は時々友達と食事したり、トランプで遊んだりするんだ。【事例a】

4.3 将来の予定

対象者たちは平均約15年間の出稼ぎを通じて、都市での日常生活や仕事についてはある程度安定してきたといえる。とはいえ彼らは、自分の年齢や学歴などの制約もあって、新たな職業生活を切り開くことは難しいと認識している。そのような条件のもとで、彼らは家族生活を維持するために、将来についてもそれぞれに具体的なビジョンもっていた。

aさんやdさんは収入の高い安定的な仕事に従事しているため、勤め先を変える可能性はあっても、出稼ぎをしばらく続けることを予定している。そして、その後についても、aさんは、「都市の家は高いので購入することを夢にも見なかった。私と妻は今実家で家を新築することを考えているよ」と述べている。dさんはまだ当分、子どもが教育期間を終えて自立するまでは働き続けたいという。またbさんは、料理人としての技術があるため、しばらく都市で働いて貯金が貯まったら、妻の実家に行って、そちらで家族と同居しながら自分のレストランを開きたいと考えている。子どもの世話のために妻が再び出稼ぎにくるのは難しいだろうことを前提として、「僕も妻もこのまま別居を続けるのが嫌だし、実は地方都市と大都市の収入差が小さくなっているようなので地方に戻るのもいいじゃないかと思う。都市ほどストレスたまらないしね」とbさんは語っていた。また、中国では早期から出稼ぎを始めた農民工の中で、都市生活の魅力を実感し、様々な努力をして都市に定住することを希望する人も多いのだが、cさんもその中の1人である。都市に残りたい理由について、cさんは、「都市の教育水準は高い。仕事のチャンスも多いし」と語った。将来、家族全員の農村戸籍を都市戸籍に変更し、都市

に住みつくことを希望している。

また、子ども数は生活の質を左右することを認識しているため、aさん、bさん、cさんは1人っ子のままでいいと考えている。

昔農村では多子多福と考える人が多かった。僕の両親は私たちにもう一人ぐらい産んでほしいようだが、私たちはもう産まないと決めた。だって、今、一人っ子だけでもかなり苦勞しているからね。たくさんの子を産んで皆で貧しい生活を送るより、1人の子に集中してお金や精力をかけ、しっかりと育てたほうがいいと僕は思うよ。

【事例c】

40代のdさんはこの3人と違い、子どもが2人いる。最初の子どもが女の子であったため、息子がほしかったということも2人目をもうけた理由である。しかし、現在は「男の子でも、女の子でもよかったかも。だって娘のほうが僕のことを思いやってくれる。僕に心配をかけないし」と考え方が変わったという。将来については、さまざまな制限もあって、再婚は無理だと認識しており、当分子どもたちのために頑張ると語っていた。

また、娘を持っているaさんは、息子を持っているbさん、cさんに比べ、生活ストレスが大きくないようだ。娘を育てる費用は息子の場合と比べて「少なくとも10年間分、稼ぎがすくなくてよい」とaさんが語った。対象者たちは、息子は娘より良い教育を受けるべき、結婚する際に家を用意してあげるべきと考えているためである。そして娘と息子両方がいるdさんは、両者の将来の人生設計について明らかに違う考え方を持っていた。

娘は現在の専門学校を卒業したら、普通に働いて結婚すればいいのであまり娘の人生を心配していないけど、息子は男だから違うと思う。男はいい高校に入り、さらに大学に受からないと将来就職、結婚などのこと考えられないから。【事例d】

そのためdさんは、娘が学校を卒業して結婚するまでは息子の教育費のために一緒稼いでほしいと考えているようである。

さらに親の扶養に関しては、全員が男きょうだいがいるか否かにかかわらず、「養児防老¹¹」の思想から、両親に対して経済面や身体面などでは息子としての責任を果たすべきだと認識していた。他に男きょうだいがいる場合は、そのきょうだいとの共同負担を考えていた。したがって、現在はまず子どもの養育、教育が最優先され、父としての役割に重きが置かれているとしても、長期的には、息子と

しての役割も当然果たすべきだという認識が、4人に共通してみられた。

5. まとめ

本稿では、中国江蘇省南京市に出稼ぎをしている4人の既婚男性農民工の語りをもとに、彼らの出稼ぎ前後の家族との関係を中心に、時間軸に沿って「出稼ぎに至る経緯」、「出稼ぎ後の家族生活」、「将来の予定」の3時点に分けて分析した。

本稿の分析結果は、以下のようにまとめられる。

調査対象者たち全員は1990年代に出稼ぎを始めた。1990年代から、中国国内では都市における廉価労働力への需要の増大や農村における余剰労働力の増加を背景に農民工が急速に増え、対象者たちもそれぞれの家族の経済事情により出稼ぎを促された。4人の対象者たちは、その家族状況の違いにより、出稼ぎの動機、出稼ぎを継続する理由、出稼ぎ中の家族への経済支援や家族との交流、そして将来の予定などの点で、共通項と差異がみられた。未婚で出稼ぎに出た3人(a, b, c)は、当初は出身家族の貧困が直接の動機となっていたが、結婚と子どもの誕生後は自分の家族のために出稼ぎを継続した。一方、結婚と子どもの誕生後に出稼ぎを始めたdさんは、一貫して結婚後の家族を主要な支援対象とし、妻との離婚後はその稼得役割が一層重くなっていた。現在は4人とも、家族との交流において、出身家族より結婚後の家族との交流をより重視し、特に子どもの存在は共通して意識していた。対象者たちは、結婚と子どもの誕生により、息子という立場のみの状況から、息子・夫・父という多重役割を取得し、このことが彼らにとっての出稼ぎの動機や意義に変化をもたらしている。その役割取得のプロセスのなかで、彼らの家族生活における役割意識も変化し、男性であることを強く意識する対象者たちは、全員が自分を家族における「大黒柱」と強調していた。しかし、彼らの語る「大黒柱」ということばのニュアンスは、必ずしも同じではない。aさんやbさんは妻より収入が高いこともあって、経済面の役割を強調しているが、cさんやdさんは経済面のみならず情緒面、日常ケア面なども含めたニュアンスで語っていた。特にシングルファーザーであるdさんに、この傾向は顕著であった。

しかし、対象者たちの家族生活への認識、特に子どもと離れて暮らすことや、このことから生じる家族関係を維持する困難さへの認識は、女性農民工の場合(徐, 2011)と比べ深刻なものではなかった。「妻は子どもに会いたがっているが、僕は平気だけどね」と語るaさんのように、子どもへの対応は妻任せの意識がみられた。その点、離婚に

よりシングルファーザーとなったdさんは、中学生になった息子との関係に悩んだり、息子をあずけている実家の両親の甘やかしを心配するなど、多くの女性農民工と共通する悩みを語っており、子育て役割におけるジェンダー要因の影響を推測することができた。また、子どもの教育において、女子より男子に高い教育が必要だという認識のもとに、今後の出稼ぎ継続期間などを考える傾向が4人に共通してみられ、ここでもジェンダー要因の影響を確認することができた。

本稿は、わずか4事例の中国既婚男性農民工を対象としたインタビュー調査の報告であり、彼らの家族役割や家族関係維持の在り方を考察することには限界がある。今後はより多くの男性農民工に対するインタビュー調査を継続的に行い、出稼ぎと家族生活との関連について、女性農民工の場合と体系的に比較するための語りデータを蓄積していきたい。その際、今回の対象者のa・b・cさんとdさんのように、政府の労働政策変更との遭遇時期が、彼らの年齢やライフステージのどのタイミングであり、そのことが家族関係にどのような影響をもたらすかというライフコース的な視点を活かせる分析枠組みを模索したいと考えている。

(注)

- 1 中華人民共和国の鄧小平の指導体制の下で、1978年12月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議で提出され、その後開始された中国国内体制の改革および対外開放政策のこと。
- 2 最大の特徴は住民の管理と、都市と農村の人口移動、とくに農村から都市への流入を厳しく制限することにある。
- 3 社会の底辺に位置する弱者層である。
- 4 主に両親とも都市に出稼ぎに行き、農村に残された子どもを指す。
- 5 中国では独居老人の家が、社会学者に「空巢」と称されている。
- 6 南京市は中国江蘇省の省都であり、政治・文化・経済の中心であるとともに、長江経済デルタ地域の主要都市の1つでもある。沿海都市への低廉労働力の供給基地として知られる江蘇省北部や安徽省と隣接しているため、労働者不足の問題はそれほど深刻ではなく、定着率も比較的高いようである。
- 7 1元 = 約12.5円；dさんは妻と2007年に離婚した。
- 8 生産隊或いは生産大隊といった集団による生産管理体制。
- 9 各農家は一つの単位となり自分で生産・分配及び経営を管理する形態。
- 10 都市戸籍ではない農民工の子どもたちが都市の学校で勉強する権利を得るための費用。
- 11 大事に息子を育て、その子に老後の面倒をみてもらう。

(文献)

- <http://www.soc.titech.ac.jp/publication/Theses2008/master/06M43338.pdf/2009.8.23>
<http://rchina.jp/article/45997.html?sesid=&category=WHATSN>

- EW&p=0/2011.6.23
- Gordon F. & Deborah R.G., 2007, *Family Life Course Transition and the Economic Consequences of Internet Migration*, Population Association of America Annual Meeting, New York.
- 金一虹, 2010, 「中国における労働力移動からみた農村のジェンダー構造」, 明石書店『越境するジェンダー研究』, 36-156.
- 大久保孝治・嶋崎尚子, 1995, 『ライフコース論』, 放送大学教育振興会.
- 李強, 2001, 「中国出稼ぎ農民工の実家への仕送りに関する調査研究」, 中国社会科学院『社会学研究』第4期.
- 陸小媛, 2009, 『現代中国の人口移動とジェンダー - 農村出稼ぎ女性に関する実証研究 -』, 日本僑報社.
- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析法 原理・方法・実践』, 新曜社.
- 蘇林, 2005, 『現代中国のジェンダー』, 明石書店.
- 徐琴, 2011, 『中国女性農民工のライフコースと家族生活—家族関係維持のための戦略に注目して』, お茶の水女子大学修士論文.
- 張玉林 (首藤明和訳), 2008, 「第8章:離村時代の中国農村家族」, 首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族個人と家族の再編成』, 明石書店.

Family Roles and Family Relationship Maintenance of Male Chinese Migrants : A Research in Nanjing, Jiangsu Province

Qin Xu

(Human Developmental Sciences)

In China, farmers move from the poor rural areas to big cities or rich rural areas of the coast part becoming migrant workers. The migrant workers enter the cities and start to work exceeds 140 million people in 2009. Based on interview investigations to married male migrant workers from rural areas who had at least one minor child, this study found details about their selections of working away from home, this experience's influence on themselves and their families, also influence on family relationships and their attitudes to their families. This study attempts to organize the life course of 4 male migrant workers and find their recognition to family roles on their families.

Concretely, the main conclusions and findings of this study can be summarized as follows: ①All of them migrated mainly for their families' economic reasons, but not by individual choice. ②Their recognition to family roles will have an obvious change after they got married, especially after having a child. Interviewees who migrated before marriage provided most of their financial aids to from family before marriage. But after they got married, they would pay more attention to reproduction family. Most of them rarely communicated with their families before marriage. But they would make efforts to interacting with family after their children were born. ③Children are considered to be the most important both on economic and emotional support during their migration. Jo (2011) found that female migrant workers find empowerment in their role as financial providers on the family, so many end up feeling that they have not lived up to the cultural notions of 'good mothering'. Males in this research are not feeling guilty about their absence.

Keywords: male Chinese migrants, family roles, family relationship, economic support, emotional support